



Frank A. Lombard

同志社人物誌 (44)

フランク・A・ ロムバード

木村俊夫

今や百年をこえる同志社の歴史の中で、その今日を築きあげてくれた多くの先輩の中にも、私は私なりに、特に親近感をおぼえ、強く関心を持つ数人の人々がある。ロムバード先生(Frank Alanson Lombard 1872-1953)はその最たるものである。

宣教師教授としての先生の同志社在職の間は一九〇〇年から一九二六年までの四半世

紀に及び、その間先生は、英語、英文学関係の科目を中心に、実に多くの講座を担当され、同志社の学問的水準を高めるために尽瘁されたのみならず、学校経営についても、その中枢にあって多大の貢献をされた。この先生の業績のごくあらましを私は心得てはいたものの、先生の生涯全般に関して私の持つ知識はつい最近までは全く断片的なものでしかなか

った。

先生はその晩年、一九三七年に再び同志社を訪れ、講演もされた記録があるが、この時英文学科の学生であった私は、その講演会に出席していない。少くとも出席した記憶がない。その頃の自分はまだ先生については何も知らず、何の関心も持っていなかった。先生への強い関心はそれよりしばらく後にはじまる。大学卒業後、英米演劇に主として親しむことになった私は、やがて先生の書かれた「日本演劇史」やシェイクスピアの作品若干の註釈書のあることを知り、それらを読むことを通して先生の学識にふれ、やがてその人となり、同志社とのかわり、生涯全般についてくわしく知りたい願いを持つようになった。先生の亡くなられた一九五三年、先生の追悼会が当時の英文学科関係者を中心に持たれたが、それに参加した私は、その日のプログラムの中で、先生の「日本演劇史」について短い談話をさせてもらっている。今も尚その日のプログラムを私は大切に保存しているが、もうこの頃すでに私の先生への関心は、かなり強いものとなっていたのである。これより少し以前には、先生註釈の「リア王」を

教室で使用したことも憶いだされる。

一人の人物に、わけても会ったこともない異国の人に、後になるほど関心がたかまって行くということも一つの不思議ではある。しかもその関心に応えて、やがてその人物を更によく知る手がかり——しかも、得がたい、貴重な——をさずかるということは奇縁ともいえよう。私はロムバード先生に對し、この奇縁を得たという気持ちを今痛切に感じている。話を最近のことにひきよせよう。ロムバード先生の孫に當るエドウィン・ペーカー・ロムバード氏が、一九五〇年からしばらくこちらの英文学科の講師として来任された。彼は今は又アメリカにあって研究を続けているはずであるが、彼がまだ同志社にいた頃、このエドウィンのお父さん、つまりフランク・ロムバードの子息、エドウィン・H・ロムバードとその夫人のエリザベスが同志社を訪問されたことがあった。その折、この親子三人とだけで、私は一夕食事を共にし、ロムバード先生のことを中心にずい分長いこと話したものである。今から四年前のことである。

同志社大学アメリカ研究所のプロジェクト

に宣教師研究部門があつて、数人の方々が数年前から熱心にその研究を進めておられる。私もロムバード先生への関心から、このプロジェクトに参加した。併し私のロムバード先生について持つ知識は依然断片的なものでしかないというもどかしさは、とりきれないままだった。誰かロムバード先生の伝記を書いていないか。どうもそれはありそうにない。先生は日記は残しているであらう。但し生涯にわたつてのものなどとても期待できないであらう。かりにあるとしても、どうしてそれを読むことができよう。大体、未公開の日記にまでふみこんで、先生を「調べる」「研究の鬼」にはとてもなれない私である。一番よいことは、先生が自伝を残してくれているということである。ロムバード先生ならば、それを書いてある若干の可能性はある、と私の感は教えてくれた。併し一体その有無を調べる手がかりをどこに求めようか。子息に一度手紙を書いてみようか。要約すれば、大凡右のような気持ちを抱いたまま、昨一九七八年、私は在外研究を許されて、久しぶりにハーヴァードを訪れた。この度の留学も、先生のことを調べるのを主な目的としていたわけ

ではなかったが、副次的に、ロムバード先生に関する資料を点検することを計画していた。そしてありがたいことに、先生の書き残されたいくつかの資料を手にすることができた。わけでも、あることを願っていた自伝そのものが未刊のまま保存されてあることを知った。大きい喜びであつた。ハーヴァードでコピーした先生関係の資料をおけておへ。

一 *Impartial Japanese Poems of the Meiji Era*, trans. from Japanese, (C. P. Putnam's Sons, New York, 1915)

二 *Pre-Meiji Education in Japan. A Study of Japanese Education previous to the Restoration of 1868* (東京・教文館 1913)

三 *A. B. C. F. M. History 1910-1943 Section of Japan* (1944)

四 *Scattered Leaves* (Marshall Jones Co., Francetown, N. H., c. 1944)

五 *The Lombard Traditions: chapters of Autobiography*
なお、この他に、

Liberal Education in Japan. Broad-

dening Tendencies Since 1868 (A. B. C. F. M., Boston, 1923)

という短論文があるが、これの保管されてあるアンドヴァのライブラリへは、予定が狂って、行かずにまいになり、コピーをとらなかつた。

右の内一、は明治天皇御製百近くの英訳。

二、はいうまでもなく、日本の教育史であるが、先生はこの方面でも造詣深く、自伝によれば、先生の研究を、クラーク大学のホール博士は博士論文として受理してもよい、という申し出もあったということを付記しておく。

三、はタイプライターで打った未公開のもの、*A. B. C. F. M. History 1910-1943*の第一巻を構成する三つの論文の内、その三番目のもので、長さおよそ二五〇枚である。四、は一二〇頁からなる詩集で、七〇近い創作に、日本の唱歌の英訳二つ、それに謡曲の「江口」と「大原御幸」の部分訳を含んでいる。五、が先生の自伝である。ロムバード家の家系の話からはじまり、アリス夫人の亡くなられた一九四三年までをカヴァーしている。タイプで打って三七〇枚に及ぶ長篇である。

所タミス・プリント、読みの通りにくい所があり、又頁の打ち方も整理されていず、まだ若干推敲の余地は残しているものの、完成に近いものである。二部に分かれ、合計一六章からなっている。同志社に生涯を捧げられた先生が、同志社在職中の事柄の記述にその頁の大半を費やしておられるのは当然である。

ニューイングランドの謹直なクリスチャンらしく、節度を守り、筆を抑えて書き残されたこの記録は、正に私があらまほしく思っていた姿の自伝である。この短文の中に、その内の小さなエピソード一つをも紹介する余裕はないが、この自伝は、前記二、三の資料と共にマイクロ・フィルムにとって、今アメリカ研究所に保管され、大方の利用を待っている。私自身、できれば近く、この自伝全文を翻訳するか、少なくとも整理した形で、しかもくわしく、その内容を紹介したいと思っている。

付記・前記資料の内、一、と四、は筆写したものを私が所持している。

・先生の書かれたシェイクスピアの註釈テキストの内、「ハムレット」「ジュリアス・シ

ザー」「お気に召すまま」「冬の物語」をお持ちの方、又はその所在をご存知の方は、ご一報いただければ幸いです。右のいずれも The Commercial Press, Shanghai 発行のものです。

(大学文学部教授)

